

第一部 講演 1

月経前症候群に漢方治療が奏効した一例



矢内原 純子 先生

純子ウィメンズクリニック自由が丘

1996年 聖マリアンナ医科大学医学部 卒業、昭和大学産婦人科学教室 入局
1997年 亀田総合病院 研修
2001年 蒲田総合病院
2004年 昭和大学藤が丘病院(2009年 兼任講師)
2020年 純子ウィメンズクリニック自由が丘 院長

はじめに

月経前症候群(PMS)は「月経前3～10日の黄体期の間に続く精神的あるいは身体的症状で、月経発来とともに減退ないし消退するもの」と定義されている。

原因は明らかではないが、選択的セロトニン再取り込み阻害薬が有効とされていることから、卵巣ホルモンと神経伝達物質の間に原因があると推測されている。

症状は、身体症状(乳房張り感、腹部膨満感、むくみ、だるさ、頭痛、腹痛など)と、精神症状(イライラや情緒不安定、抑うつ気分や自己評価の低下など)がみられる。

治療はバランスのとれた食事、適度な運動と、薬物療法などが行われる。

症例

症例：37歳 女性。

主訴：月経前の2週間、全身倦怠感、めまい、動悸、不眠、過食などの症状により調子が悪く、日常生活に支障がある。

現病歴：2人目の出産後に産後うつとなり、臨床心理士等の世話になり、食事指導なども受けることで改善がみられるものの本調子ではない。薬には抵抗があるが、漢方薬なら服用できると考えて当院を受診した。

東洋医学的所見：図1に示す。

臨床経過(図2)：初診時診断はPMSであり、東洋医学的所見より水滯・気の異常と診断し、半夏白朮天麻湯と加味逍遙散の服用を開始した。

治療開始1ヵ月後では症状は改善していなかったため漢方薬の服用を継続した。多忙なために来院できずに1ヵ月間処方空いてしまったが、再来院時に「改善しかけていたのに休薬が入り、また症状が悪化してしまった。漢方が効いていたかもしれない」と前向きな意見も聞くことができた。

その後、症状も改善し、「随分調子が良くなった。1ヵ月のうち3週間はきつかったが、その期間が1週間に減った」と笑顔も見られた。

約1年4ヵ月後に「1週間前の胸のほりが取れない感じが

図1 症例 37歳 女性

主訴

月経前の2週間、調子が悪く、日常生活に支障がある(全身倦怠感、めまい、動悸、不眠、過食など)。

現病歴

- 2人目出産後、産後うつになった。
- その後は臨床心理士等の世話になっており、食事指導なども受けている。
- ようやく改善がみられるも、本調子ではない。薬には抵抗があるが、漢方薬なら服用できるかもしれないと考えて当院を受診した。

所見

身長：160cm、体重：64kg、BMI：25、血圧：124/83mmHg
超音波検査：子宮卵巣正常
血液検査：異常なし

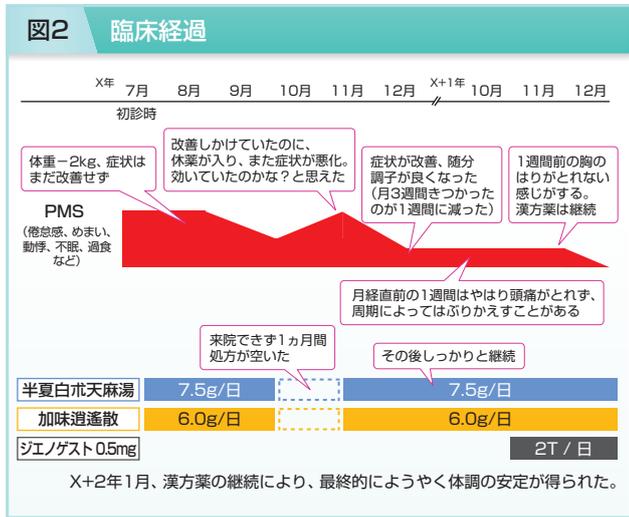
東洋医学的所見

不安な様子、声は小さい。
舌診：淡白肥大、湿潤、舌圧痕あり
脈診：沈滯
腹診：胃内振水音、腹部軟弱
他：眼瞼浮腫、下腿浮腫、足冷

初診時診断/治療

- 初診時診断(X年7月)：月経前症候群(PMS)
- 東洋医学的所見より、水滯、気の異常と診断。半夏白朮天麻湯エキス細粒(7.5g/日)と加味逍遙散エキス細粒(6.0g/日)の処方を開始した。

する」との訴えがあり、ジェノグストの併用を開始した。現在は良好に経過している。



考察

PMSは、気虚・気逆・気滞、瘀血、水滯と様々な症状を認める(図3)。

本症例の治療では、水滯に対して半夏白朮天麻湯を選択した。蒼朮・沢瀉・黄柏により組織内に停滞した水分を除去し、浮腫や頭痛の改善を目的とした。また、ふらつき、

図3 原因から考えるPMSの東洋医学的病態

気虚・気逆・気滞

脳内のホルモンや神経伝達物質の異常の関与
→無気力、いらいら、落ち込み、など

瘀血

月経前は血液が滞った状態
→便秘、ニキビ、のぼせ、下腹部痛、肌荒れ、など

水滯

黄体ホルモンの水分貯留作用
→むくみ、悪心・嘔吐、めまい、関節痛、冷え、しびれ、など

めまいを強く訴えていたため天麻が必要と考えた。さらに、虚している状態であったため、人参・黄耆などで消化吸収を高め、全身の機能・代謝・抵抗力を高めることを目的とした。

気の治療に対しては、加味逍遙散を選択した。うつ傾向や不安が強かったため、柴胡・薄荷による精神的ストレスの緩和を目的とした(図4)。

図4 半夏白朮天麻湯と加味逍遙散の構成生薬



まとめ

PMSは、東洋医学的観点からも、気血水の異常が多岐にわたる病態であると考えられる。

半夏白朮天麻湯は全身倦怠感やめまいの水滯に、加味逍遙散は動悸、不眠、過食などの気滞や気逆に有効であり、PMSの様々な症状に対応することができた。

Discussion

木村: 半夏白朮天麻湯と五苓散をどのように鑑別されていますか。

矢内原: 頭痛でも、虚証で疲れやすいなどの症状が強いときには人参や黄耆、天麻を含む半夏白朮天麻湯を選択し、頭痛のみのときや口渴が強いときには五苓散を使用しています。

木村: 本症例では加味逍遙散が奏効しましたが、「肝」に対する処方の抑肝散加陳皮半夏も鑑別になると思います。先生は臨床でどのように使い分けていますか。

矢内原: 不安や抑うつが強いときには加味逍遙散を選択し、肝気の高ぶりが強く、消化器症状を伴う場合には抑肝散加陳皮半夏を選択しています。